

白山ユネスコエコパーク実績報告書

百万貫の岩の起源を探る

石川県立大学 柳井清治・小川弘司・片山 樹・大丸裕武

1934 年の際に宮谷川から手取川に流出して堆積したとされる百万貫の岩の起源について、これまでいくつかの報告があるが確定したものではなかった。今回その起源とみられる場所において、巨岩群を LiDAR データやドローン、そして現地調査により解析し同時にその岩の周辺に広がる地すべり地形の年代と花粉分析を実施した。この結果、手取川の合流点から 2 km さかのぼった場所に巨岩群が多く分布する溪流区間があること、その区間は面積 40ha に上る大きな地すべり地形の末端に位置すること、そしてその地すべりの年代は、堆積層に含まれている木片の炭素 14 年代から約 2 万年前にさかのぼることが明らかになった。また地すべり地内には厚く泥炭が堆積しており、その炭素 14 年代は 1 万年前後であり、泥炭層に含まれる花粉分析からその当時からブナ・コナラ属（ミズナラ）を主体とする落葉広葉樹林であり、現在の白山の植生と類似する森林構成だったと考えられた。地すべり本体の形成時期は最終氷期最寒冷期にあたり、岩石の風化が促進され、砂礫の生産が盛んであったとされている時期である。さらにそれ以降にも土砂移動の激しい時期が複数存在し、地すべり内に包含されていた百万貫の岩は洗い出されて宮谷川に露出したものである。そして 1934 年の豪雨の際に、百万貫の岩周辺の狭窄部に石礫や流木が堆積し天然ダムが形成され、それが決壊することで土石流が発生し巨礫を動かしたと考えられた。天然ダムの形成場所については今回特定できなかったが、今後詳細な地表 LiDAR 計測により周辺の巨礫の配置などから推定を行うことが可能となる。